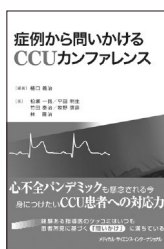


[評者]
水野 篤
聖路加国際病院循環器内科、
QI センター/聖路加国際大学
急性期看護学



症例から問いかける CCU カンファレンス

樋口義治 編

● A5 変形 頁 308 2019 年 2 月
定価：本体 5,000 円＋税
[978-4-8157-0147-5]MEDSi 刊

この本を手にとったときの感想はどうだろうか。なんか“懐かしい”感じがした。これは本書のスタイルなのだろうか。思い返せば、メディカル・サイエンス・インターナショナル、村川先生の『循環器治療薬ファイル』のスタイルだ。何かブレないものを感じる。数多くの症例を提示しているが、すべてにおいて、現病歴から・心電図から・そしてその他の臨床検査の結果から“問いかけている”。この“ブレない”姿勢は本当に見事だと感じる。何より、すべての症例においてこれでもかというぐらい細かい記述がある。本書の背後には、ベッドサイドで戦う臨床医の姿しか見えない。

本書の特徴としては、上に述べた懐かしい感じもそうだが、何より、この「問いかける」作業にある。『症例から問いかける CCU カンファレンス』なので、ぱっとタイトルだけみれば、最近かなり多くあるような CCU のカンファレンス実況中継のようなものを想像するかもしれないが、私の読んだ感じは全く違う(筆者の先生のイメージとは違うかもしれない)。この本で問いかけているのは“自分”だ。実際の実臨床の現場においても、この「問いかける」作業というのは、実際にカンファレンスの現場のみで実践されているというよりは、患者に接した“自ら”に“問いかけている”のである。患者の一人ひとりで、一つの所見が出るごとに、それぞれの背景を考察する。これは外来患者であろうが、入院患者であろうが、すべての患者で実践すべき「問い」である。もし、少し循環器診療になれてきた先生が忙

しい毎日で仕事がルーチン作業化してしまっているようであれば、忘れてしまいがちなこの点を是非強調しておきたい。昨今のガイドラインや、Take home message のみで抽象化されてしまったものとは一線を画す、極めて具体的な思考回路がここに凝集されているとを感じる。

オープンという言葉が死語となり得る中、本書での思考回路の共有は循環器学の教育の基本中の基本であり、決して失われることのない臨床現場での教育であると考ええる。自分も安易な Take home message などといった教育方法に向かっていってしまいがちな中、一つ釘をさされたような気がした。「臨床はそんなに甘くないぞ」と。

個人的には、この症例集は少し慣れてきたぐらいの 3~5 年目ぐらいの循環器志望の先生、特にある程度、基本的な循環器診療に慣れてしまっているような先生に読んでもらいたい。今はガイドラインなどで抽象化された情報はいつでも得ることができる。しかし、実際の患者に向かったときにどのように自分に「問いかける」ことができるかで、本当の医者としての能力を試されている。襟を正して、明日からの医療に向かう勇気を持ち、一つ一つの症例をゆっくり読みあげるのが本書の適切な使い道だと感じる。ゆめゆめ、タイトルだけ、コラムだけ目を通して、症例をすべて分かったような気にならないでほしい。